

金曜コラム - 私の生涯最後の全国体育大会

金ジェリョン(ファクション高校体育教師)

第 99 回全国体育大会女子高部の漕艇競技に参加する子供たち四人で秋の朝、川に船を浮かべた。8 日後の試合を控えて、まだ 4 人で完全に試合艇に乗れないでいる。一番前の指導者が引っ張って「上位入賞」ではない完走を目指し訓練をしている。クラシックスポーツの王様と呼ばれる漕艇試合に挑戦している子供たちが誇らしくもある。全国体育大会を控えてあれこれ心を揉みながら生きてきて、いつのまにか三十年が過ぎた。体育教師として国体に首をつないで生きてきたのだ。どれほどうんざりする生活だったのか紹介しよう。今年の全国体育大会の漕艇競技場は金剛河口堰（訳注：忠清南道静川郡の観光地、群山をつなぐ唯一の橋が美しい）という。2000 年にゲポ高校（訳注：開浦高、ソウル江南）で働いていたが突然トライアスロン部が作られた。翌年国体にトライアスロンオープン戦が導入されたときに 3 人の選手の子供を連れて行ったところだと推測される。その際男の子かがランニング中に倒れ、救急車で搬送した記憶がある。その翌年には私たち市民連帯の風雲児、オ・ヒョンジョン先生が全国体育大会トライアスロンチームで江原道選手団に金メダルを獲得したこともあった。

体育教師を始めながら、本格的に運動部を引き受けざるを得なくなったのは 20 年以上前のことである。数年間、中長距離陸上部を引き受け、晋釜駅伝（訳注：晋州-釜山 141.3km）、メホン駅伝競技大会（訳注：1932 年 4 月 29 日の上海天長節爆弾事件を実行した尹奉吉義士を記念する大会）や国体まで子供たちを引率した。作られたばかりのバスケットボール部は後に教育長まで務めたチャン体育部長が引き受けた。4 年ぶりに江南の学校に移ってボーリング部とトライアスロン部を引き受けた。文民政府に続く参与政府が発足したが、2002 年のワールドカップの熱気に埋もれて運動部の子供たちの現実は一つも変わらなかった。そんなときに 2003 年、天安小学校サッカー部合宿所の火災惨事が発生したのである。

2004 年ソウルから江原道に転勤内示を受けて初の発令を受けたのは東草サン高（現雪岳高校）であった。陸上部中長距離選手たち四、五人と野球部があった。運動部の両方を担当しなければならなかった。総合運動場の合宿所で生活する陸上部の子供たちの現実は残酷だった。野球部の子供たちの生活もあまり変わらなかった。合宿所生活は完全に学年別上下関係の秩序によって行われていたし、反復訓練は厳しかった。例えば打撃コーチが内野に出したゴロを捕れなかったとき、ヘルメットをかぶった頭で受ける事になる。何人かの子供はヘルメットをかぶった頭で受けられず、素の頭で野球のボールを受けなければならなかった。

2006 年、体育高校に学校を移った。体高は運動部を担当している体育教師を皆が「監督」と呼ぶ場所だった。近代 5 種の副監督という声を 1 年聞いたが翌年には十五人の体高在職体育教師の中で唯一「監督」から排除された。全教組（訳注：全国教職員労働組合）の教師であることに加え、エリートスポーツに批判的な私を体高に送った人事システムも笑えることだった。体高から 2 年ぶりに女子高に移ってフェンシング部とバスケットボール部指導教師になった。2013 年に中学校に移り、テコンドー部を引き受けた。その年に道体育会の理事を始めた。

翌年には再び特性化高校（訳注：特定分野の人材育成を目標とする専門高校）に学校を移り、選手が一人だけの漕艇部を引き受けたが、女子サッカー部がある学校であった。再び一年ぶりに学校を移ったが 3 年の間、全く運動選手がなく、一般の子供たちが朝の川に船を浮かべることを見ているのだ。体高を去った後、これ

までのすべての学校のうち、初めて運動選手の子供たちとコーチ（指導者）に最初に要請することは私を「監督」と呼ばずに「部長先生」と呼ぶようにすることだった。いまだに巧技育成という名前で運動部がある少なくない学校で運動部を担当する体育教師を「監督」と呼称している。

私は学校現場で「監督」という呼称にいつも不快感を感じてきた。サッカー・野球・バスケットボール・バレーボールなど、主に団体球技の **Head coach**、**Manager** がいつから「監督様」になったかは分からない。私を知っている「監督」という言葉は、奴隷時代に黒人奴隷を「監督していた白人」、植民地時代プランテーション農場の「暴悪な監督」である。とにかく権威主義時代の遺物のように感じられるし、数年前に選手たちを性的接待の道具程度に侮ったプロバスケットボールチームの「監督」や、有名な国際映画祭で受賞をしたが性暴力で訴えられた「映画監督」を思い出すためである。

フース・ヒディンク（訳注：2002年ワールドカップで韓国チームを4位に導いた）と朴ハンソ監督（訳注：2018アジア大会でベトナムサッカー代表を初めて4強に導いた）を除いて、有名代表監督の感じも別にして変わらない。チームで監督という存在が自ら光を放つ瞬間は感動である。そのほかのすべての場所でいくら有名人といっても「権威」と「悪習」にこだわるとき、積弊に墜落することを自覚できなければならない。証人なのか参考人なのか宣銅烈（ソン・ドンヨル）監督（訳注：昨年、野球代表チームで初の専任監督に就任し2020年東京オリンピックをめざす）が国政監査場に出てきたという。韓国スポーツの歴史で初のことである。「新たなスタート、大胆な旅」という言葉で世界が変わってきているが、スポーツ版ではそれに追いつくことができない必然的な結果である。

来週には体育教師として二十年以上欠かさなかった国体に、最後に漕艇部の子供たちを引率する。そしてまだエリートスポーツに埋没されている大韓民国のスポーツ版を振り返るのである。一年後に学校を去るとき、体育・スポーツ体育人として生きてきたことが「うんざりする生活」だけではなかったと言えたら幸いだ。
(結)

01 連合ニュース 2018.10.1

【「脱、多くの」運動選手・芸術兵役特例制 1年以内に改善案を作成】

「2018 ジャカルタ・パレンバンアジア大会」を契機にして論議になった体育・芸術人の兵役特例制度の改善を検討する兵務庁・文化体育観光部の合同タスクフォース（TF）が1日に発足しました。

兵務庁によると、「芸術・体育要員制度革新実務 TF」は先月28日の顔合わせを兼ねた最初の会議の後、本格的な活動に入りました。

金テファ兵務庁次長が団長であるこのTFには、兵務庁の社会服務局長・社会奉仕政策課長・規制改革法務官・現役入営課長、文化体育観光部の公演伝統芸術課長・体育政策課長・大衆文化産業課長などが参加しました。

兵務庁の関係者は、「このTFは今後毎月1~2回定期実務会議をして芸術・体育要員制度の改善案を検討する」とし、「外部専門家の意見、公聴会、世論調査などを通じて革新的な案を用意する」と言いました。TFの活動期間は1年であり、国防部はTFが用意した制度改善案を兵役法改正案などで法制化する予定です。

現行兵役法によると、▲オリンピック3位以上の入賞者▲アジア大会1位入賞者▲国際芸術コンテスト2位以上の入賞者▲国内芸術コンテスト1位入賞者は、芸術・体育要員（補充役）に編入されます。芸術・体育

要員として編入されると4週間の基礎軍事訓練を受けた後、民間分野での得意分野で活動を続けます。一定期間の技術ボランティアの義務が付与されますが、軍生活をしないという点で事実上、兵役が免除されるわけです。

これにより兵務庁長が指定する国際大会で一度の入賞だけで兵役恩恵が与えられる現行制度に問題があるという指摘がいつも提起されてきました。特に2018ジャカルタ・パレンバンアジア大会で野球代表チームなどに参加した選手たちが大挙して兵役特例給付を受けて公正性の問題が浮上しました。

スポーツ界ではオリンピックとアジア大会入賞者のみ利益を与え、世界選手権などの他の国際大会入賞者には与えないのは公平ではないという指摘がありました。芸術の分野でも国際コンクール入賞者など芸術のみ兵役特例を適用して大衆芸術は排除するのは公平性に反するとの指摘も出ました。米国ビルボードメインチャートのトップに二度も輝いた防弾少年団の場合、国威功労がアジア競技大会の金メダル受賞者に劣らず大きくても大衆音楽の分野だということで恵沢を受けられないことに対して不満が大きかったです。

政府は芸術・体育兵役特例を廃止するよりも、兵役特例の適用基準を強化しながら公正性と公平性に合致する制度改善案を用意する方針であると伝えられました。

ギ・チャンス兵務庁長は先月3日、聯合ニュースとの話で体育・芸術兵役特例制度の改善と関連して、「今後、兵役資源が減少するため、(戦闘兵ではなく戦闘警察や消防員として服務する)転換服務と(良心的兵役拒否者などを除く)代替服務も廃止される」とし、まず、兵役特例基準を厳格にする方向に制度の改善を検討する方針だと明らかにしました。

<https://sports.news.naver.com/general/news/read.nhn?oid=001&aid=0010371830>

02 エムスプールニュース 2018.10.2

【 ジョン・ミョンギユ「国政監査証人確定」...スケート積弊実体が明らかにされるか 】

10月1日、国会の関係者は「10日から開始する文化体育観光委員会の国政監査にジョン・ミョンギユ教授が証人として出る予定」とし「与・野党幹事会議で元教授の証人採択が最終的に確定した」と伝えました。文体委与党幹事である共に民主党ソン・ヘウォン議員は「ジョン・ミョンギユ元スケート連盟副会長は、大韓民国スケート積弊の中心であり、スケート連盟を管理団体に転落させた核心人物と目されてきた人物だ。5月文化体育部の特定監査時には既に元副会長と関連した様々な疑惑と議論が事実で明らかになった」とし「スケート連盟の根源的な問題は何であり、特定の人の専横がどのように行われ、その専横に善良な選手たちがどのように犠牲になったのか、ジョン元副会長の国政監査出席で事実関係が明確に明らかにすることを期待する」と述べました。

いろいろな疑惑と議論が事実で明らかになっても最近、ジョン元副会長は所属大学である韓国体育大から「減給3カ月」の「綿の棒で叩くような」軽い懲戒を受けた。

授業時間にゴルフ場に行って、前助教に学校寄付寄託の強要とゴルフクラブの費用肩代わりを要求した事実が明らかになったが、韓国体育大は懲戒のなかで叱責とともに最も軽い減給3ヶ月の軽懲戒処分を与えるに留まった。おかげで現在ジョン元副会長は何の制約なしに学生を教えています。

韓国体育大に重い懲戒を要求した文部科学省は、韓国体育大から「減給3カ月」の通知を受けたが、半月を過ぎても立場を明らかにしていません。教育界の内外で「韓国体育大と教育省官僚が典型的な”いかさま花札”をしている」という声が出てくるのもこのためです。

これまでジョン元副会長の永久除名を要求してきた「若いスケート人連帯」ヨ・ジュンヒョン会長は「ジョン元副会長は、いくつかの疑惑と議論が事実で明らかになっても反省はおろか、謝罪を一度もしていない。逆に”まだ水面下での影響力を行使している”という話しを聞いている」とし「果たしてジョン元副会長が国政監査の場でも過去にスケート人に向かって雷のように怒鳴りつけたように自分の声を上げるのか、多くのスケート人と共に見守る考えだ」と話しました。

<https://sports.news.naver.com/general/news/read.nhn?oid=529&aid=0000027580>

03 スポーツ朝鮮 2018.10.4

【 危機の韓国バドミントン尻尾切り?... 根本的な対策が必要 】

韓国バドミントンの危機論が絶えることはありません。

去るジャカルタ・パレンバンアジア大会で40年ぶりの「ノーメダル」の屈辱を経験した韓国バドミントンは先月30日に終了し、ビクター・コリアオープンでも2年連続で「ノーゴールド」で名誉回復に失敗しました。

銅メダル3個を獲得したが、世界のトップランカーが大挙抜けた事と日本の大躍進を考えると、事実上「お茶の間宴会恥さらし」でした。一方、朴ジュボン監督(54)率いる日本は金3個、銀2個、銅4個をさらって史上最高の成果を挙げました。

アジア大会の失敗に続いて韓国はコリアオープン直前に出場した日本オープン(銅1つ)と中国オープン(ノーメダル)でも虚弱な競争力をあらわにしました。こんな状況でも、これといった突破口が見い出せません。世代交代のための選手団改編の過程で構造的な問題が解決されていない上、執行部(バドミントン協会)まで「タ立ちの一時しのぎ式」に対応しているからです。このため、執行部への不信の声が大きくなるなど、団結上手で知られたバドミントン界が揺れています。

▶過度の引退行進... 予想された崩壊?

2016年リオ五輪での失敗を味わった協会は、世代交代を通じた選手団改編を突破口としました。それ以後、イ・ヨンデ(30) ユ・ヨンソン(32) ゴ・ソンヒョン(31) シン・ベクチョル(29) 金ギジョン(28) 金サラン(29)などの男子ダブルス最上位圏6人と、金ハナ(29) 李ジャンミ(24)などの女子ベテランたちが次々と代表チームから引退しました。残った女子ベテランのジョン・キョンウン(28) - ジャン・イェナ(29)も去るアジア大会で出場機会を得られないのに押し出された形です。彼らが引退した後、韓国バドミントンの国際舞台の成績は続けて「低空飛行」です。後輩にノウハウを伝授し導いてくれるべきベテランをあまりに急激に入れ替えた協会の方式に問題があるという指摘が多いです。ほとんどのバドミントン指導者は「他の種目に比べバドミントンは特にこのような特性が強い。後輩は先輩たちと一緒に揉まれながら競合して学び、成長する」とし「世代交代も良いが軟着陸をすべきだった」と口をそろえます。

バドミントンスター李ヨンデが2008年の北京オリンピックで李ヒョジョン(37)との混合ダブルス金メダルでスターダムに上がった後、ジョン・ジェソン(2018年3月36歳で死亡)、高ソンヒョン、ユ・ヨンソンなど先輩たちと一緒に世界のトップを走ってきた事をさす言葉です。これらの引退選手は現役の後輩たちと比べても技量の面では決して押されないというのがバドミントン界の定説です。引退選手が個人の資格で国際大会に出場し、「賞金稼ぎ」に汲々としてチームを去ったという主張もありますが、必ずしもそうではありません。協会との目に見えない葛藤など、他の理由もありました。選手団改編は協会の決定でした。

この決定に対する疑念が静まるどころか、去る 5 月に「引退選手の個人資格の国際大会出場資格制限」についての法廷での争いで選手たちが勝利し、むしろ広がっています。

▶まず尻尾切り... 根本的な対策は？

ジャカルタの屈辱を受けて帰国した協会が最初に行った措置は、代表チームのコーチングスタッフ 7 人の辞表を提出してもらったとわかりました。現在の代表チームのコーチングスタッフは、いわゆる「余命わずかの人生」として後続の対策が出てくるまでの指導を受け持っています。このような状態で最近コリアオープンを開催し、今月中旬のヨーロッパツアーを引率する予定です。続いて協会は先月 19 日に理事会を開き、競技力向上委員会（以下競向委）委員の全員辞表を提出しました。競向委は代表指導者と選手団を構成する役割です。競技人の出身なので協会上層部、先輩たちの影響力から自由になれないという事実を、知っている人はみな知っています。コーチングスタッフと競向委の辞任がアジア大会の失敗についての責任を負う姿であると解釈されています。この点で「果たしてコーチ陣の責任だけにすることか？」という不満の声が上がっています。協会が「尻尾切り」で責任を転嫁しようとしているとの批判も出てきています。協会の「目に見えない力」は公然の秘密です。責任から自由になれない要因が存在していても下の人の責任甘受で乗り越えようとするれば、別の抵抗を呼ぶこととなります。匿名を要求したある関係者は、「複数の苦情の要素が積み重なっている。いつ爆発するか分からない物騒な雰囲気」と言いました。

<https://sports.news.naver.com/general/news/read.nhn?oid=076&aid=0003323791>

INFOMATION

体育市民連帯 ソウル市 瑞草区 瑞草洞 1485-3 スンジョンビル 305 号

체육시민연대 서울시 서초구 서초동 1485-3 승정빌딩 305 호

Tel : 02-2279-8999、E-mail : sports-cm@hanmail.net

ホームページ : <http://www.sportscm.org/>

日本語訳 : 佐藤好行 新日本スポーツ連盟 国際活動局 韓国担当 jr1fgpe@jarl.com